博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　澤田　ゆかり　　印

学位申請者　呉 迪（ゴ　テキ）

論　文　名

A Linguistic Ethnography of a Chinese-Populated Housing Complex in Suburban Tokyo

（東京近郊の中国人集住団地における言語民族誌）

【審査結果】

2026年10月02日、本学の澤田ゆかり（主査）、アリアン・ボルロンガン（主指導教員）、日下渉、およびグラシア・ファーラー（早稲田大学）、リサ・リム（ヴィン大学・カーティン大学）からなる審査委員会は、呉 迪（ゴテキ）氏より提出された博士学位請求論文“A Linguistic Ethnography of a Chinese-Populated Housing Complex in Suburban Tokyo”（和文題目：東京近郊の中国人集住団地における言語民族誌）の審査および口述による最終試験（公開審査）を実施し、全員一致で博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

【論文の構成】

本論文は英語で執筆されているため、以下の章題は主査が日本語に訳したものである。

序論

第1章　「チャイナタウン？ いや、ここはホームだ」――移住、言語、そして芝園の形成

第2章　芝園を歩き回る――「目」から捉える場所と言語

第3章　芝園団地におけるサウンドスケープ（音景観）と方言による話し言葉の実践

第4章　芝園団地に暮らす中国人の子どもたちの移動性、言語使用と言語学習

第5章　言語的移置と空間的再編成――芝園団地周辺における共存と主流化

第6章　芝園団地で暮らすことについての民族誌的自伝

第７章　総合的考察と結論
倫理的配慮
参考文献
付録

【論文の概要】

本論文は、東京近郊の大規模団地に形成された中国人移住者の集住地域を対象として、住民の日常的な多言語実践と、生活空間、社会関係、アイデンティティとの関係を言語民族誌（linguistic ethnography）の方法によって分析した研究である。具体的には、埼玉県川口市の芝園団地をフィールドとし、言語景観、音声景観、家族の言語実践、さらに団地周辺の教育・商業空間へ広がる多言語使用を分析している。

著者は約２年間にわたり団地に居住し、参与観察、フィールドノート、写真・音声資料、インタビュー記録を収集した。これらを通じて、移住者が地域社会に定住する過程で言語がどのような役割を果たし、多民族・多言語的な生活空間がどのように形成されているのかを考察している。

まず序論では、研究の着想と対象地域の特徴と、理論的および方法論的な位置づけが説明されている。著者は2022年に初めて芝園団地を訪れ、中国人住民の多さと多様な言語が聞かれる環境に関心をもった。横浜、長崎、神戸などの伝統的な中華街が商業・観光空間として発展してきたのに対し、芝園は中国人をはじめ、バングラデシュ、スリランカ、ネパール、ベトナムなど多様な背景をもつ移住者が日常生活を営む居住空間である。著者は外部から観察するだけでなく、自ら団地に居住し、住民として生活しながら長期的な参与観察を行った。本研究は言語民族誌と移住言語学(migration linguistics)を基盤とし、とりわけ移住後に一定の地域で定住する段階におけるミクロな言語・社会実践を捉えることを課題とすることが述べられている。

第１章では、国際移住と中国人ディアスポラ、在日中国人の増加を概観した上で、芝園団地の特徴と本研究の理論・方法、研究課題を提示している。章題の「チャイナタウン？違う、ここはホームだ」は、著者が芝園を「チャイナタウン」と呼んだ際の中国人住民の反応に由来している。著者はこの発言を、芝園が商業空間ではなく、移住者が生活し、家族を育て、社会関係を築く居住空間であることを示すものとして捉えた。その一方で、住民構成の急速な変化に伴って生活習慣等をめぐる摩擦も生じてきた。中国人住民への排斥的な言葉が団地内のベンチに刻まれた出来事と、その後の多文化交流の取り組み等を取り上げ、芝園を摩擦と共生への試みの双方が観察できる地域として位置づけている。

理論面では、移住言語学における社会的環境、言語、移住者個人という三つの側面を参照し、移住後の言語実践と生活空間、社会関係、アイデンティティとの関係を検討している。また、主要な分析概念として Linguistic Repertoire Pattern（LRP）、言語的音景観、移動の「経路」を提示している。研究方法の面では長期参与観察、言語景観の撮影、音声資料、半構造化インタビュー等を組み合わせ、芝園における言語実践の全体像、場面ごとの言語・方言の組み合わせ、地域のまとまりや文化的アイデンティティにおける言語の役割、さらに言語政策や平和的な関係形成への示唆を研究課題としている。

第 2 章では、芝園団地の視覚的な言語景観を取り上げ、公共・半公共空間に現れる多言語表示と住民による空間認識との関係を分析している。著者は、中国人の住民とともに地域を歩く民族誌的散策を行い、住民が公的機関等を中心とする「日本の空間」、中国人経営の店舗等の「中国の空間」、広場等の「共有・混合の空間」を区別していることを示す。さらに、住棟、掲示板、商業施設、公園等で長期間にわたり収集した約 650 件の表示を分析し、多言語表記が広く存在する一方、公的・制度的空間では日本語が中心的な位置を維持していることを指摘する。

また、中国語と日本語の要素を組み合わせた表示を「Chi-panese」と呼び、店主が利用可能な言語資源を組み合わせ、多様な客に情報を伝える実用的な表現として位置づけている。さらに、言語景観を時間的変化も含めて分析する視点を提示する。例えば、ごみの放置を注意する掲示に、半年後、状況が改善したことを知らせる文章が追記された事例から、表示の意味が管理者と住民との継続的な相互作用の中で変化することを示している。旧正月（春節）に掲げる縁起の良い対句（対聯）等についても、情報伝達だけでなく、文化的アイデンティティや場所への愛着を表現する働きをもつと論じている。

第 3 章では、視覚的な言語景観から聴覚的な環境へと分析を広げ、芝園の「言語的音景観」を検討している。2023 年から 2024 年にかけて、遊び場、住棟、商店、飲食店等で計 135 件の音景観を記録し、場所、時間、参加者、使用言語・方言等から分析した。その結果、中国語が広く聞かれる一方、遊び場では子どもを中心として中国語と日本語を組み合わせた会話が多く、商店や飲食店では大人による方言を交えた会話が多いなど、空間と社会関係に応じた傾向があることを示している。

特に中国人経営の飲食店では、中国語の普通話と地域方言、日本語、朝鮮語等が客の背景や店主との関係に応じて使い分けられ、方言が同郷者としての親密性や帰属を示す資源となっている。一方、長江流域の安徽省出身の住民を継続的に観察した結果、周囲に多い中国東北地方の話し方に次第に合わせながらも、そ

こに疎外感や抵抗を感じる経験が示される。著者は、中国人移住者内部にも方言間の不均衡があり、方言が連帯を形成する一方、異なる背景の住民を周辺化する可能性もあると指摘している。

第4章では、中国人の子どもと家族に焦点を当て、家庭、学校、遊び場等を移動する中で、子どもがどのように言語を使い分け、社会関係を形成するかを分析している。フィールドノート、音景観、インタビュー、子ども自身が描いた移動経路図等を組み合わせた結果、親子間や来日直後の子ども同士では中国語が多く、中国人と日本人の子どもが一緒に遊ぶ場合には日本語が共通語となる傾向がみられた。相手や場面に応じて言語を柔軟に使い分ける一方、他の民族的背景をもつ子どもとの交流は限られており、多民族的な居住空間がそのまま緊密な民族間交流につながるわけではないことも示している。

さらに著者は、中国生まれの兄と日本生まれの弟からなる一家族を継続的に観察し、その結果を紹介している。兄は来日当初、日本語をほとんど理解できず学校生活に困難を経験したが、学校での支援や中国人向けの学習塾を利用しながら適応した。兄弟は家庭では中国語、中国人の友人とは中国語、日本人の友人とは日本語を主に用いるが、親は中国の親族との関係や将来の日中双方での生活可能性を考慮して子どもたちの中国語学習を重視していた。また、芝園を最終的な定住地ではなく、その後の国内転居や帰国までの中期的な生活拠点と考える家族もみられるが、その一方で広場、商店街、教育施設等を通じて家族間の情報交換や相互扶助のネットワークが形成されることも明らかにしている。

第5章では、分析範囲を団地内部から周辺の教育・商業空間へ広げ、多言語実践が地域を移動し、その機能や社会的位置づけを変化させる過程を検討している。芝西中学校陽春分校の夜間中学では、中国、ベトナム、モンゴル等の多様な背景をもつ生徒が学び、日本語が制度上の中心言語である一方、生徒の母語も学習補助や日常交流に用いられている。異なる出身国の生徒同士が日本語で関係を築く事例から、日本語が制度参加のための言語であると同時に、移住者同士をつなぐ実用的な共通語として機能することを指摘している。

これに対して周辺の商業地区では、中国語を中心とする多言語表示や「Chi-panese」が広がり、移住者の言語が文化的アイデンティティを示すとともに、商業的・実用的な資源となっている。著者は、公的教育空間では日本語中心の秩序の中で多言語資源が補助的に利用されるが、商業空間では住民や市場によるボトムアップの多言語化が進むという、場所ごとに異なる重層的な言語秩序を示している。この比較を通じて、多言語化を単一の方向へ進む現象としてではなく、制度、地域社会、市場等によって異なる形で調整される過程として捉えている。

第 6 章では、それまでの分析的記述から文体を転じ、約 2 年間の芝園での生活経験をエスノグラフィー的自伝として記述している。著者は、当初は居住を参与観察の方法として考えていたが、次第に「住みながら調査する」のではなく、「まず暮らし、その後で調査する」という意識へ変化したと述べる。近隣住民との交流、地域行事、葬儀への参列等を通じ、研究者と住民との境界が薄れ、芝園への帰属意識が形成される一方、中国への郷愁も同時に強まった過程を振り返っている。

また著者は、多文化共生を「一度達成すれば完結する状態」ではなく、住民の日常的な交流によって維持され続ける過程として捉える。そのため画一的な政策モデルを提示するのではなく、それぞれの地域社会における住民の声と日常的実践を踏まえることが重要であると指摘している。章末では平和についても、日常の会話、食事、地域行事、死を悼む経験等、人々の具体的な出会いの中で実践され続けるものと位置づけて、多様な背景をもつ人々の平和的な共存が日々の関係の積み重ねによって形成されることを示唆している。

第 7 章では、以上の分析を総括し、言語、空間、アイデンティティ、多文化共生の関係を総合的に考察している。言語と民族、アイデンティティと国籍を固定的に結びつける見方を批判し、住民が場面や相手に応じて複数の言語資源を用いながら、複層的な帰属意識を形成している、と著者は論じる。また芝園の多文化共生を、完成された状態ではなく、住民間の継続的な調整を必要とする「ガラスの共生（Glass Coexistence）」と表現している。多言語による情報提供、中国人住民の自治会活動への参加、地域行事等を通じて協力関係が形成されてきたが、その一方で偏見や外国人排斥、住民間の交流の乏しさ、制度的支援の持続可能性等の問題も残されている。このことから、共生には住民自身の日常的実践と、それを支える制度的な仕組みの双方が必要であることが指摘される。

最後に、本研究の貢献として、言語、空間、アイデンティティが日常的な相互作用の中で形成されることを明らかにした点、住民自身から生まれる多言語実践を政策的に支える必要性を示した点、一つの地域に長期間居住する「ディープ・エスノグラフィー(deep ethnography)」によって言語景観、音声景観、子どもの言語実践、住民関係等の相互のつながりと時間的変化を捉えた点が挙げられている。統計的な一般化ではなく、一つの地域社会を長期間継続して観察することによって、多言語・多文化的な生活空間が形成され、変化していく過程を具体的に描き出すことに本研究の方法上の特徴がある、と著者は述べる。以上を通じて、芝園団地を、移住者の増加に伴う摩擦や課題だけでなく、住民による言語的・社会的な調整を通じて新たな共存のあり方が模索される場として描き出している。

【審査の概要】

本論文に対する公開審査は、2026年10月02日(金)15:00から約2時間半をかけて、本学研究講義棟317教室およびZOOMによるオンライン配信のハイブリッド形式で実施された。審査員の構成は、澤田ゆかり（主査）、アリアン・ボルロンガン（主指導教員）、日下渉、および外部審査員のグラシア・ファーラー（早稲田大学）、リサ・リム（ヴィン大学）の５名であった。審査では、冒頭に著者から本論文の概要と趣旨について説明があり、その後に各審査員との間で質疑応答が行われた。

本論文は、以下の点で高く評価された。

第一に、著者が約2年間にわたり芝園団地に居住し、一住民として日常生活や地域活動を通じて行った長期的な参与観察により、厚みのある言語民族誌（linguistic ethnography）を生成したことが挙げられた。著者自身が中国出身の移住者かつ地域住民として調査対象者との関係を築き、さらに調査の過程でその立ち位置が変化したことを自覚的に研究に取り込むことによって、通常の聞き取り調査だけでは捉えにくい日常的な言語実践とコミュニティの動態が具体的に描き出されていた。

第二に、多言語的な生活空間を捉えるにあたり、視覚に基づく言語景観（linguistic landscape）だけでなく、日常会話などの音環境（soundscape）、インタビュー、子どもの移動経路や言語実践など、多様な資料を組み合わせた点が挙げられた。とりわけ、視覚的な表示を中心に論じられがちな言語景観を聴覚的側面へと広げ、移住者の居住空間における多言語使用を日常生活の実践として立体的に捉えた点は、本研究の方法論上の重要な特色となっている。

第三に、中国人移住者を均質な集団として捉えるのではなく、子どもを含む世代間の差異、移住経験の違い、中国語内部の方言やアクセント等の多様性にも目を向け、それらの言語実践を帰属意識、社会関係、共生、包摂と結びつけて考察した点が挙げられた。これにより、移住者が集住する地域社会において、多様な言語と文化が共存する生活空間が日常的な相互作用を通じて形成され、変化していく過程を具体的に示した点にも、本研究の学術的・社会的意義が認められる。

その一方で、本論文に対する問題点や疑問点として、以下が指摘された。

第一に、本研究の先行研究における位置づけと、主要な概念の解釈について、さらに深く検討する必要があるとの指摘があった。すなわち日本における中国人移住者やチャイナタウンに関する研究蓄積を十分に踏まえ、芝園団地が従来型のチャイナタウンや近年形成された中国人の集住地域とどのように異なるの

かを、より明確にする必要がある、ということである。特に、第１章の題名に用いられた “China Town？No！ This is home” という発言については、中国語の原語と発話の文脈を明示するとともに、「ここに住んでいる」という意味と「家（home）」への帰属意識とを慎重に区別する必要があるとの指摘があった。

また本論文自体も、芝園を最終的な定住地ではなく、その後の転居や帰国までの中期的な生活拠点と考える住民の存在を示しており、「家（home）」という概念をどこまで一般化できるかについても検討が必要である。さらに、本論文が批判する本質主義的な言語・アイデンティティ観について、具体的な先行研究との関係を明示すること、および移住言語学の既存研究に対して本研究がどのような新たな知見を提供することが求められた。

第二に、言語の分類と分析概念については、より厳密な検討が必要であるとの指摘があった。本論文では普通話、地域方言、アクセント等の違いを重要な分析対象とし、中国人移住者内部にも言語的な多様性や不均衡が存在することを示している。その一方で、“Chinese”という包括的な表記も多く用いられていた。記述にあたって著者は、中国語内の普通話、広東語その他の言語変種や方言、アクセントをより正確に区別する必要がある、との見解が示された。また、本論文で提唱された Linguistic Repertoire Pattern（LRP）について、既存の linguistic repertoire や translanguaging の議論に対して、どのような新たな分析上の意義をもつのかを明確にする必要があるとの指摘があった。さらに、音声景観の分析において、特定の方言やアクセントが「際立つ」「後景化する」とする判断が、主として調査者自身の知覚に依拠している点について、その判断根拠と研究者自身の言語的背景・立場性をより明示する必要があるとの意見が示された。

第三に、本論文のリサーチ・クエスチョンが主として「どのように（how）」という問いから構成されているため、豊かな民族誌的記述が得られている反面、「なぜ（why）」という観点からの分析をさらに深める余地があるとの指摘があった。特に、本論文が提示する「ガラスの共生」がどのような条件のもとで形成されるのかについて、住民自身による日常的な言語・社会実践と、団地管理部門、自治会、自治体等による制度的な管理・支援が、それぞれどのような役割を果たしているのか、また住民自身の言語実践が具体的な対立やトラブルの調整にどのように寄与したのかについて、実際の観察事例に基づく説明が求められた。

第四に、「ガラスの共生」の持続可能性について疑問が示された。本論文では、芝園を最終的な定住地と考えない家族や、一定期間の居住後に転居・帰国する住民の存在も示されている。このように住民の流動性が高い地域において、著者は多文化共生を持続させるためには、住民自身の日常的な実践だけでなく、管理部

門や自治体等による継続的な制度的支援が不可欠と考えているのか、との質問がなされた。

また本論文は、中国人と日本人の子どもが遊び等を通じて言語的・文化的境界を越える可能性を示す一方、そうした交流がその場限りに終わる場合や、他の民族的背景をもつ子どもとの交流が限られていることも指摘している。そのため、成長に伴って交友関係や生活空間が変化した後も、子どもたちを将来の共生の担い手として位置づけることができるのか、との質問が寄せられた。

以上の指摘と質問に対して、呉氏からは次の回答があった。

第一の指摘に対しては、チャイナタウン研究を含む先行研究との関係や、「home」という表現について、さらに検討する必要があることを認めた上で、本論文の移住言語学への貢献として、従来の研究が人々の移動そのものに注目する傾向があるのに対し、本研究では移動後に一定の地域で定住する段階に焦点を当てたことに特徴があると説明した。また日本の郊外団地における日常的な言語・社会実践をミクロな水準から描くことによって、東アジアの事例から移住言語学に経験的な知見を加えることを意図したとの回答があった。

第二の指摘に対しては、言語の分類や LRP 等の概念について、より精確な記述と検討が必要であることを認めた。その上で、LRP は言語レパートリーにみられる使用パターンを捉えるために導入した概念であり、個人の認知過程まで論じるには別の方法論的検討が必要であるとの認識を示した。また、音声景観における方言やアクセントの「際立ち」については、調査者自身の知覚に基づく判断であったことを説明した。

第三の指摘に対しては、「ガラスの共生」は住民自身の実践だけでなく、団地管理部門等による制度的な管理との相互作用によって形成されていると説明した。すなわち管理部門が生活上の秩序の基本的な枠組みを提供する一方、住民の日常的な言語実践が、その枠組みを実際の地域生活の中で機能させているとの見解を示した。具体例として、日本人と中国人の住民がごみ出しをめぐって対立した際、日本語やジェスチャー等を交えた対話によって双方が次第に落ち着いた事例を紹介した。

第四の指摘に対しては、住民の流動性が高い地域で共生を持続させるには、住民自身の実践に加えて、管理部門等による継続的な制度的対応も必要であるとしながらも、子どもたちが成長後に芝園を離れても、異なる背景をもつ人々とともに生活した経験は記憶として残り、その後の人生にも影響を及ぼす可能性があると回答した。

以上のように、審査員の質問に対する呉氏の返答は、問題点を自覚したうえでの誠実なものであり、今後の研究における改善や発展を示唆するものであった。

公開審査終了後、審査委員会で審議を行った結果、本論文は、長期にわたる参与観察と豊富な言語資料に基づき、異なる言語的・文化的背景をもつ住民が日常的に接触する中で、地域に固有の言語実践と社会関係を形成し、共生のあり方を模索していく過程を具体的に描き出したものであり、独創性、実証性および学術的意義のいずれにおいても博士論文として十分な水準に達しているものと評価された。以上に基づき、審査委員会は全員一致で、呉氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。